

---

# ああ、懐かしの友よ

RAB

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ああ、懐かしの友よ

### 【Nコード】

N8812S

### 【作者名】

RAB

### 【あらすじ】

本因坊秀策の幼馴染だった少年「大河」が前世の記憶を持ったままなんとヒカルのクラスメイトに転生！？  
佐為が取り憑いてからのヒカルの棋力などに過去の幼馴染の影を見つけた大河は……

**\* 注意書き（前書き）**

とても珍しい設定ですが、精一杯がんばるので感想などぜひ書いて下さったら嬉しいです

**\* 注意書き**

ここのオリ主の設定はとっても独創的です。

こんな主人公なんか嫌っつ！

というような方は申し訳ございませんがお引き取りください。  
残って下さっている方々が楽しんでいただけるようにがんばりたい  
と思います（ ・ ・ ・ ）

《主人公設定》

加賀 大河

・ 歳

現在 ヒカルと同じ年

前世 秀策と同じ年

・ 性格

荒くれ者……

・ 備考

暮の腕前はプロ上段者級。しかし、前世で秀策に取り憑いていた  
佐為により圧倒的な差を感じさせられ、それ以来あまりやらなくな  
った。秀策とは佐為が秀策に取り憑くまではとても良いライバルだ  
った。が、佐為が取り憑いた秀策に負けてからいきなり強くなった  
秀策に不信感を若干抱いている。ヒカルにも同じようなものを感じ  
ている。加賀の弟である。



## プロローグ(前書き)

うわぁー……

ついに始めちゃいましたよ(^^人^^)

ヒカ碁連載!!

## プロローグ

バチッ      ビシッ      バチッ……………

二人の少年が囲碁を打っていた。

ビシッ      バチッ……………

「……………ありません…」

「「ありがとうございます。」」

「虎次郎……………お前どーしてこんなにいきなり強くなった？昨日までのお前と違いすぎる！しかも棋風まで変わってんじゃねーかつっ！？いつてえどーいうことだよ！？」

負けた方の少年が勝った方の少年に怒鳴りつける。

「……………ごめん。大河……………もうキミとは打てない……………」

勝った方の少年は、悲しそうな顔で謝る。

「ごめんって何だよ！？打てないって！？オレ達好敵手だったんじやねーか？お互いに高め合って、碁打ちを目指そうって言ってたじやねーか！？」

「ごめん……………ごめんね、大河……………」

「……もういい。オレはもうお前の好敵手にはなれねえんだな。……  
オレは碁打ちになんねえ。お前一人でなってる。」

「なんで！？キミだって碁打ちになりたかったんだろ！？目指せば  
いいじゃないか！」

勝った方の少年、虎次郎は慌てたように言う。

「オレが碁打ちになりたかったのは、お前と打つ碁が面白かったか  
らだ。もうオレにとって碁打ちなんて意味ねえんだよ。」

そう言っただけで負けた方の少年、大河は席を立った。

「大河………」

バツ………

「……夢か……ずいぶん遠い昔の夢だな………」

辺りを見渡すとそこは”現代”の自分の部屋だ。外を見ると、もう  
夕方になっているということにオレはとても驚いた。少し小腹がす  
いたのでリビングに行くと、そこには今日将棋部の部長なのに何故  
か囲碁の大会に出た兄貴がいた。



「お、大河じゃなーか。やっと起きたのかよ。もう夕方だぜ?」

「自分でもビックリだったの。兄貴こそ今日の大会どーだったんだよ?」

兄貴はその問いを待ってたかのように笑顔で話した。

「それがなー、優勝したんだが、こっちの三将が小学生ってことがバレて失格。おしかつたんだがなー。」

オレが小学生? って顔をしたことに気づいた兄貴がそのことについて話した。

「人数が足りなかったからさ、出てもらったんだよ。そいつの強さが謎なんだわ。いきなり強くなったり、弱くなったり。」

「いきなり……………??」

オレはそのことに何か引っかけりを持った。

「おう。たしかお前と同じ年のヤツだぜ。進藤                      ヒカルって名前前だな。」

「進藤                      ヒカル!??」

「おっ!??知ってんのか?」

進藤                      ヒカルの名前に反応したオレに兄貴は驚いて聞いてきた。

「知ってるもなにも、クラスメイトだぜ。しかもあいつ最近囲碁教

室に通い始めたばつかみただし、大会に出れる程の力なんてないはずなんだけど?？」

「どーいうことだよ?あいつの決勝での棋力なんてプロ並だったぜ?最近始めたとかじゃありえないだろ?？」

「兄貴、その対局並べてくれない?」

「ああ。」

兄貴はオレが持ってきた碁盤に例の対局を並べてくれた。美しい黒と白の石の並び。しかし、オレには何か見覚えのあるその棋風……

……

「虎次郎……??？」

オレは誰にも聞こえない声でそつとつばやいた。



## プロローグ（後書き）

秀策の口調わからんわー……

あと、加賀の口調もなんかおかしい……  
アドバイスよろしく願いします！！

## 1 懐かしの「暮」？（前書き）

佐為の言葉ですがオリ主には聞こえませんが。

『』を使っている物も聞こえてませんので、注意してください！！

# 1 懐かしの「碁」？

あの棋風は虎次郎と全く同じである。

オレはこのことは断言できる。しかし、ありえないだろう。この時代にあいつと同じ棋風のヤツがいるなんて……。たしかに虎次郎……いや、本因坊秀策はこの時代でも有名で、たくさんの棋譜が現代にも残っている。しかし現代では新しい定石などができ、その結果、本因坊秀策の棋譜によりたくさんのことを学んだとしてもあそこまで一緒の棋風になるわけが無いのだ。なのに、あいつ「進藤 ヒカル」は、同一人物が打ったとしか思えないような碁を打った。

「これは本人に聞くしかないな。……いや、あやまれるか？いきなりお前何故ここまで本因坊秀策と同じ棋風なんだ？なんて聞くのは……対局してみるか……？」

まあ、とりあえず学校に行くか……と思いオレは家を出た。

学校に着くと、進藤 ヒカルはもう席に着いていた。オレは意を決して話しかけてみることにした。

「なあ進藤、お前囲碁強くなったんだって？兄貴から聞いたぜ。昨

日の大会あと少しで優勝だったんだってな？」

「え?? お前兄貴って……もしかして加賀ってあの加賀の弟なのかよ!?!?へえー気づかなかったな!。」

「たぶんその加賀の弟であってんよ。オレ実はちよつと碁打てんだよ。そんで、昨日の決勝の碁見せてもらってさ。一回お前と打ってみたくなつたんだよ。だから、今日の放課後打たねえか?」

そういうと、進藤は慌てだした。何やらボソボソと独り言を言い出した。そういえば虎次郎もいきなり強くなつてからこんな感じになつたよな……。なんか関係があんのか??

『どーすんだよ? 佐為!? 加賀つてクラスメイトなんだぞ!? お前の力とかバレたらヤバくないか??』

『大丈夫ですよ、ヒカル。指導碁を打てば……まあ、塔矢ぐらいの腕でしたら、指導碁ということがバレるでしょうが、これぐらいの歳の者で塔矢ぐらいの腕の者なんてそうはいませんから。』

『……わかった。』

「今日の放課後だつたら空いてるよ。でも何処で打つんだ??」

独り言が終わつた進藤はオレに話しかけてきた。小さな声過ぎて、独り言の内容は聞こえなかったが、誰かと話しているようだった。進藤は電波君なんか……? いやそしたら虎次郎も……??

「あ、ああそれだつたらオレん家なんてどうだ? 学校からなかなか近いし。」

「わかった。そんじゃ放課後な！」

それから授業を受け、やっとのことで放課後になった。

「進藤行くぜー！！」

「あつ待てよ、加賀！！」

オレ達は家に着くまでたわいない話とかで盛り上がった。もともとオレらはクラスでもなかなか話す方だったので会話には困らない。まあ、男子というのは女子と違って、グループとかあまり作らないのだが。

「あつそういえば、家に兄貴いるかもしんないから、オレのこと「大河」って呼べよ。兄貴とごちゃになってまぎらわしいからよ。」

「そっさいやそーだな。わかったよ。」

「……………大河……………??？」

「どうしたんだよ、佐為??なんかあったのか？」

……………進藤はまた独り言を始めたようだ……………

「いえ、知っている者に顔も名もそっくりだったもので……………。気に



しないで下さい。』

『そりゃ凄えな……』

「進藤早く入れよ！！独り言なんて言っただけでさ！！」

「あつ、悪い悪い、今入るよ」

オレの声でようやく動きだした進藤はオレの部屋に入ってきた。オレの部屋はつきり言って殺風景だ。必要最低限の物しか置いていない。まあ、今日はそれプラス碁盤と碁石が昨日から出しっぱなしのため置いてあるが……そんなつまらない部屋を進藤はグルグルと見回している。

「何にもねえな。碁盤と碁石ぐらいでさ。」

「まあな。漫画とか兄貴の借りるし、別に困らねーよ。」

「そっかー……んじゃ始めるか??」

「そーだな。」

オレと進藤が碁盤の前に座る。お互いに碁石を取り、蓋を開ける。中を見ると、オレのには白石が入っていた。

「オレのに白石入ってたから、オレが握るぞ?」

「うん。」

オレが握った碁石の数は14、進藤は2個黒石を置いていた。

「進藤が先手だな。コミは五目半でいいか？」

「うん。じゃ、始めよ。」

「お願いします」

1 懐かしの「暮」？（後書き）

先に言っておきますが、私に囲碁知識はございません！

おかしな点など、どんどん指摘してください！

あと今後の展開など希望がある方は感想の所に書いて下さい。  
できる限り取り入れますので。

## 2 懐かしの「暮」？（前書き）

感想ありがとうございます）、）、（）

もう少し更新頑張りたいです（^人^）

## 2 懐かしの「碁」?

先手の進藤が黒石を置く。右上スミ小目だ。進藤の石の置き方とはとも素人くさい……よくこんな打ち方であんな碁が打てるな……いや、やっぱり何かあるのか?そんなことを考えつつも、オレは次の一手を打った。すかさず、進藤も次の手を打つ。

パチッ      バシッ      ビシッ

みるみるうちに美しい棋譜が作られていく。いや、それだけではない。進藤はオレ相手に指導碁を打ってきた。そんなことは、まだ囲碁を始めたばかりの少年にできるはずがない。これは確実に何かがあるな……

バシッ

………秀策のコスミ………

進藤はそれを打ってきた。現代ではコスミというものができ、使われなくなってきた「コスミ」を……

「……………虎次郎……………」

『ー?っつっ』

『どーしたんだよ、佐為??』

『……………少し気になることが……………いえ、今はこの対局に集中しまし

『よう。』

対局はどんどん進んでいく。オレは進藤にこれ以上指導碁なんてさせないように真剣に打った。進藤の打つ手がだんだん厳しくなってくる。

ビシッ

……これ以上は打てない……

「ありません……」

「「ありがとうございます。」」

……負けた……しかし、この対局でわかったことがある。それは……

「なあ、進藤。この碁、お前が打ってないだろ??」

「『!?!?』」

進藤は凄く驚いた様子でこちらを見てくる。

「なっ……何言ってるんだよ??ここには、オレとお前しかいねえじゃん!」

「どう考えたって、つい最近囲碁を始めたばかりの奴が打てるよーな碁じゃねーよ!ー!まだ幽霊とかに取り憑かれて打ってるとかの方が信じるっつーの!ー!」

「『!?!?!?』」

……えっ!?!?まじなんですか?その反応……

「あつ悪いー、そういえばオレ今日用事あるんだったわ。じゃーな  
!?!」

「あつおい!!待てよ!逃げんなっつー!?!」

そう叫んだときにはもう遅く、進藤は走って帰ってしまった……さ  
すがに進藤の足には追いつけない……

「くっそー!?!絶対あいつの強さの秘密を暴いてやる!?!」

オレの声は虚しく響いた……

ところ変わって、走り出した少年は……

『おいっ佐為!?!お前のせーでバレかかったじゃねーか!?!』

『すみません……あの者が思ったよりも強くて……というより、あの者、あの歳であの強さはいささかおかしいですね……塔矢アキラよりも強かったです。』

『え！？まじで？？大河ってそんなに強いのかよ！？』

『ええ……そしてあの碁……以前どこで見た気がするのですが……』

『んなわけねーじゃん。それより明日からどうしよう……』

『……一人で百面相をしていた……』





## 2 懐かしの「碁」？（後書き）

あーー

今後の展開どうしよう……

勢いではじめたからネタが……

何かアドバイスや感想お願いします（＾Ｏ＾）／

### 3 懐かしの「暮」？（前書き）

くわあー……

話の続き考えるの難しい……

へルプです（>人<:）

### 3 懐かしの「暮」?

あれからオレは進藤に避けられている……同じクラスだから絶対に捕まえられないはずなのに、なぜかもう三日間も避けられているのだ。あいつはオレの気配でも読めるのか!?まさか本当に幽霊が取り憑いていて、進藤が逃げるのでも手伝っているのか??

「こうなったら、意地でも捕まえてやるぜ!!」

オレは固くそう誓った。

今日は金曜日。今日を逃したら来週まで話が聞けない。だからオレは今まで以上に進藤を捕まえようとしたが捕まらない……………ここは、方法を変えるべきだとオレは考えた。オレは進藤の席からノートを一冊とっておいた。もちろん、誰にも見られないようにして。今は帰りのHRが終わったところ。進藤は当たり前のごとく、ダッシュで教室から出ていった。

「なあ、藤崎。お前進藤の家知ってるか?」

「え?知ってるわよ。でもそれがどうしたの??」

藤崎はオレの質問に不思議そうに答えた。

「ああ、それは進藤のやつ、オレにノート貸したまま帰っちゃったんだよ。今週の宿題に必要なのにさ。だから返しに行こーと思ってな。」

「それなら私がヒカルに届けとこうか？私、ヒカルの家のお隣さんなの。」

「いや、いいよ。オレが借りたんだし。この後もとくに用事もないしな。」

「そう？じゃあ、ヒカルの家までの地図書くからちょっと待ってね！」

……………。作戦成功……………。進藤の家までの地図を手に入れたオレは、早速進藤の家に行くことにした。

「ここか、進藤の家は……………」

ピンポーン

呼び鈴の音が響く。するとすぐに進藤のお母さんと思われる人がインターフォンに出た。

「はい、進藤です。」

「あ、僕、ヒカル君のクラスメイトの加賀　大河です。ヒカル君に借りていたノートを返しに来ました。ヒカル君はいらっしやいますか??」

オレは対大人用の猫をかぶって答えた。

「あら、わざわざごめんなさいね。でもヒカルまだ帰って来てないの。だから私が預かっときましようか?」

あれ?進藤ってオレより先に学校出たよな?と思いつつ

「ありがとうございます。でも僕自身もヒカル君に用があるので、少し待つときます。」

と答えた。

「なら、部屋に上がって待ってってくれる?たぶんすぐに帰って来ると思うから。」

「わかりました。」

進藤の部屋に入ると、碁盤どころか、囲碁関係の本なども見当たらなかった。あれ程の実力をこの短期間につけるにはそれ相応の努力が必要だろう。これでまた一つ不信な所を発見した。

待つこと15分ほど、下から「ただいま」という進藤の声が聞こえて来た。

「全くさ、大河のやつしつこいよなあー。これも全部佐為のせいだ

「からな!!」

進藤が独り言を言いながら階段を登ってくる。……てか、サイって誰だ？オレが色々考えているうちにガチャツと音をだしながらドアが開き進藤が部屋に入ってきた。

「!!!??なんでお前がここにいるんだよ!?大河!!」

「このノートを届けに。てか、お前“サイ”って誰だよ??」

そう言った瞬間、部屋はシーンと静かになった……。

### 3 懐かしの「碁」？（後書き）

皆さんに質問なのですが、大河ってプロ棋士になって欲しいですか？？

今悩み中なのです。ぜひ聞かせてほしいです！！



#### 4 懐かしの「暮」?

素晴らしい程の沈黙が部屋に広がる。

というか、ヒカルは完璧冷や汗をかいている。

これはもう、自分で「何かあります!」って言っているのと同じだとオレは思う。

「……進藤……もうここまでバレちゃってたんだ。さっさと話した方が楽になるぜ?」

オレは進藤に笑顔で話しかける。

もちろん、逃がさねえぜ!!

という意味を含めた笑顔だ。

『佐為!!どーすんだよ!?!これは誤魔化しきれねえぜ!!!』

……また独り言だ。

これは本当に幽霊と話してんのかもな。

『……正直に話しましょう。』

『!?!何言ってたんだよ!?!オレが頭おかしい奴って思われるじゃん  
っっ』

……何か焦っているような進藤。

一人で斜め後ろを見ながらだ。

「……もしかして、そこに誰かいんのか?」

「『!?!?』」

「……いや、そんなに驚かれても……  
これまでの行動を総合して見ると、一番妥当な線だし……  
しかも、その驚き具合じゃ、肯定だな。」

「ああ、そこにいるのが、“サイ”って奴なんだな？」

オレがそう言うと、進藤は目に見えておろおろとし始めた。  
ホント、おもしれえな……

「そんなに、おろおろしなくても、別に誰にも話さねえよ。ただ、  
一つ聞きてえことがあんだ。」

進藤はおろおろしていたのをピタッとやめて、戸惑いがちにオレを  
見る。

「……聞きたいことって？」

「あー……進藤にじゃねえよ。その取り憑いている幽霊にだ。」

「えっつ……私にですか!?!?」

進藤はまた斜め後ろを見る。  
たぶん、どーするかを聞いているんだ。

「どーする、佐為? 答えるか?」

「取り敢えずは、質問を聞いてみたくしよう。出来る限り答えます。」

「……………それで、何なんだ？」

進藤がオレを見ながら言う。

ああ、ようやく、長年の謎が解き明かされるかもしれない……………

「そのサイつて奴……………江戸時代に虎次郎に取り憑いていなかったか……………？」

「『！？』」

『なつ……………なぜそのことをこの者は知っているのか……………？そして、この前の打ち筋……………まさかつつ！？』

『どーしたんだよ、佐為！？何か心当たりがあったのか？』

……………反応あり……………

やっぱりこいつが虎次郎に関わってたんだな……………

『そんな……………まさか……………この時代になぜ、松原 大河が！？』

「松原 大河……………？」

「！？」

ビンゴだつっ！

前世での名を知っているなんて進藤じゃありえない。

つまり、前世のオレと関わっていて、あの棋風……………

やっとな……………たどり着けた……………

「頼む！真実を教えてください！虎次郎のことから全て！！」

あの日、もうオレとは打てないと言った虎次郎……  
オレはあの時、キレちまって、あの場を飛び出してしまった。  
そしてそれから、虎次郎と打つことはなくなった……  
オレは後悔してるのか？

いや、分からない……

でも、あんなにずっと一緒に暮らしてきた虎次郎がいきなり、オレにあんなことを言った真実が本当はずっと知りたかったんだ……  
……

『話ましよう、ヒカル……この者には聞く資格がある……』

『……分かった、話すよ。』

「これから話すことは本当のことだからな！疑ったりすんなよ！」  
そう言って、進藤はオレが知りたかった全てを話してくれた。

「……………そうだったのか……………でも、何で虎次郎は、オレに本当のことを話してくれなかったんだ？もし話してくれたら、オレはあの後も虎次郎と打てたのに……………」

『それはたぶん、暮打ちを真剣に目指していた貴方に、私の力で暮打ちになることに対して罪悪感を感じていたんだと思います……………そして、本当の好敵手だからこそ、私の力で打ちたくなかったのでしょう……………本当にすまないことをした……………大河殿の好敵手を奪ってしまったのだから……………全ては私のせいです……………』

進藤は佐為の言葉をオレに伝えてくれた。  
そして、納得した。

ああ、あいつって真面目な奴だったからなあ……………  
……………でも、それでも、オレはすごく悲しいんだ……………

オレは静かに涙を流し始めた。  
進藤は大慌てだ。

何しろ、小学校ではガキ大将のようなオレ……………  
こんな風にオレが泣くななんて想像したこともなかったんだろう。  
というか、泣いたのなんて、何年……………いや、何十年ぶりか？まあ、  
赤ん坊の時は泣いてたんだろーけどな。

それから数分後、オレはやっと落ち着きだした。  
進藤を見ると、あからさまにホツとしている。

「なあ、佐為……………オレはもう気にしねえよ。それが、虎次郎の選んだ道だったんだからな。だけど、オレの好敵手を奪ったんだ。責任とって、これからお前がオレと暮を打てよ！」

『!?!?.....ええ、もちろんです!?!』

「佐為がもちろんだつてさ!?!.....というか、大河つて、何で江戸時代にいたんだ?」

進藤が不思議そうに問う。

ああそういえば、オレは質問ばっかして、オレのことなんにも話してなかったな。

「あー...それなんだけどな、なんかオレ前世の記憶を持つてるみたいなんだ。ちつちえ頃には無かつただけどな、だんだんと思いついてきたんだよ。」

「へえー.....不思議なこともあるんだなあー.....」

「いや、お前に取り憑いている佐為もなかなか不思議だと思つがな。」

「そりゃーそうだ!」

オレ達は向かい合つて笑い合う。

秘密を共有することで、ずっと昔からの友達のように感じる。

「よーっし!佐為、今から打つぞ!」

「あー.....オレン家、碁盤ねえよ.....」

「んじゃ、オレン家行くぞ!」

オレは進藤の返事を聞かずに部屋を飛び出す。

その時のオレは  
なんだか清々しい気分だった。

## 5 懐かしの「暮」？（前書き）

あー……………

こんな駄文を投稿していいのだろうか……………

この作品は、はっきり言って、自己満足でしかないですよね……………

とりあえず、更新です。



## 5 懐かしの「暮」?

あの日からオレは進藤とよく行動するようになった。

クラスの奴らは、いきなり一緒に行動しだしたオレ達を最初は不思議そうに見ていたが、今ではもう慣れたようで、一緒に行動していても、不自然には思われていない。

その過程で藤崎ともまあまあ仲良くなることができた。

藤崎と進藤は見ているもどかしい……

どう見ても両思いだろ！

って言いたくなる。

まあ、進藤に関しては無自覚のようだから……

……………そのうち、くつつくだろう。

「大河ー！今からお前ん家行っていい？……あいつが、打ちたい打ちたい煩いんだ……………」

噂をすると、その張本人、進藤がこっちに向かって走ってきた。

いかにも疲れまして……………って顔をしながら……………

佐為にしつこく言われたのだろう……………

「ああいいぞ。行くか！」

オレはワクワクしている。

佐為と打つ暮は楽しい。

勝ったことがないってことが悔しいがな……………

オレと進藤は他愛もない話をしながらオレの家へと向かう。

いや進藤が佐為の言葉を通訳しながらなので、三人かな。

オレの家はそんなに遠くないので、あっという間に着いた。

今日も兄は家にいない。  
なんでか知らないが、進藤が家に来る時、いつも兄は家にいない。  
不思議だ……………

「早く打って、次はオレと打ってくれよ！オレ強くなりたんだ！  
」

「ああ、いいぞ。」

と言っても、指導碁がな……………  
今の進藤の実力じゃあ、まともな対局はできない。  
だが、成長スピードがすごく早く感じる……………  
ついつい色々教えたくなるんだ。

まあ、最初に佐為とだ。

オレは碁盤と碁石を準備する。

オレと進藤が碁盤の前に座り、

「「お願いします！」」

と挨拶をする。

進藤が石を握る。

オレは黒になった。

「……………ありません。」

「「ありがとうございます！」」

そう言い終わったあと、オレと進藤は一斉に体制を崩す。

特に、進藤は正座に慣れていないようで、床にでれーんと倒れている。

「あーもう、また負けたっつ！強すぎるぜ、佐為！」

オレは進藤の斜め後ろを見ながら言っつ。  
たぶん、そこに佐為がいるからだ。

『いえ、貴方も凄く強いですよ……しかも、どんどん強くなっている……………』

「佐為が大河も強いってさ！しかもどんどん強くなっているって！」

嬉しい……………

オレよりも数段上の実力の人からそう言われるのは……………  
でも……………

「とはいっても、佐為には全く近づけてねーけどな……うーん……  
…オレはもつと強くなんなきゃなあー」

「そっかあー……それじゃ、次オレと打とう!」

進藤が顔を輝かせながら言う。

纯粹に碁を打ちたいって気持ちがダイレクトに伝わってくる。

「ああ、打とう!」

それからオレと進藤は一局打った。

進藤はやつと碁の形になっているという感じだ。

でも、話を聞いた限り進藤自身が碁を打ったことはオレと以外ほとんどないようだ。

つまり、すごい進歩なのだ。

やはり、成長スピードがすごい……

「あつオレもう帰らなきゃ!ありがとな、大河!」

「おう、また打とうな!」

進藤は慌ただしく家へと帰って行った。

たぶん、門限が危なかったのだろう……

というか、オレ……

強くなりてーなあ……

佐為と互角に打てるぐらいに……

こんな気持ちになんのいつぶりだろ……

佐為ぐらい強くなるためには、佐為以外の強い奴とも打たなきゃな  
んねえ……

どうやったたら打てるかな……

碁会場？

いや、本当に強い奴なんて限られている……

しかも、小学生のお小遣いじゃ、強い奴を見つける前に尽きてしま  
う……

他は……何か手があったつけ？

「ただいま……大河、オレ、トイレ行くからパソコンの電源入れ  
といて！オレ急いでんから！！」

どうやら、兄貴が帰って来たようだ。

たくつつ……人使いが荒えんだから……

オレはしぶしぶパソコンの電源を入れる。

うちのパソコン、立ち上がるのが遅いから……

「おーサンキューサンキュー。まったく、危なかったぜ。約束の時  
間過ぎてしまつところだった。」

兄貴がやつとやって来た。

しかも、手にはお茶とお菓子……

人に任せておいて、それかよ……

「というか、約束つて何なんだ？」

「ああ、将棋を打つ約束さ。ネット将棋だよ、碁にもあんだろ？」

ネット碁！？

そつだ、その手があった！

ネット碁だったら金もかかんねえし、いつまでだってやれるから、  
いつか絶対強い奴と打てる！！

最っ高の手じゃねーか!!

「兄貴っていつもどんくらいパソコン使う?」

「あ?オレはそんなに使わねーよ。たまに、将棋で使うぐれーだ。」

ナイスツツ兄貴!

オレが思いつきり使えるじゃん!!

「そーなんだ。んじゃ使い終わったらオレに声かけてよ。オレ、ネツト碁やってみてえし。」

「ふーん、分かった。というか、お前、最近よく碁を打つよな?どーいう心境の変化?」

そーいえば、そうだ。

オレは今世でそんなに碁に執着を見せていなかった。

碁を見るとあいつを思い出すから……

でも、今は……

「兄貴、知らなかったのかよ。オレ、碁が大好きなんだぜ!!」

この一言に尽きるな……

## 5 懐かしの「暮」？（後書き）

一応、この後の展開もある程度決まっていますが、続けるか悩む作品です……………

とりあえず、書いてある分は投稿します。

## 6 懐かしの「夢」？（前書き）

この作品を読んで下さっている方々、ぜひぜひ感想を下さい！

こんな駄文でこの先続けていいのか、凄く心配なので、意見が欲しいです……………



## 6 懐かしの「夢」?

兄貴がパソコンを使い始めてから、一時間くらいが経った。オレは、1人部屋で黙々と棋譜並べをしている。

今並べているのは、佐為と打った碁だ。

佐為と打った碁は何度並べても勉強になる。

佐為は、打ち手としても最高だが、指導者としても最高だ。

自分でも、佐為と打つ度、どんどん棋力が上がっていくのを実感する。

しかし、佐為と打つ度に思うのだ。

「あー……早く佐為と互角に打てるようになりてえ………」  
と。

全く、いつになったら、オレは佐為に追いつけるのだろうか……  
ちよっと追いついたかな？  
って思うと、また差が開く。

あんなに強いのに、まだまだ成長する佐為には驚きだ。

「あつ！そういえば、オレ、この碁佐為と検討してねえし！……」

はあー……

検討してえな……

明日にでも……って明日土曜日じゃん。  
最悪だぜ……

とオレが落ち込んでいると、居間の方から

「おーい、大河！パソコン使っていいぞ！……」

という兄貴の声が聞こえてきた。  
そうだ!!

今は、できることからしよう！  
せっかくネット暮ができるんだ。  
楽しまなくちやな!!

「サンキュー、兄貴！今行くぜ!!」

オレは急いで居間へと走った。

「お前が早く使えるように、お前のにログインしといたぜ。」

「お！まじで！？ありがとー!!」

オレはパソコンの前に座り、“ネット暮”と入力して検索してみた。

「おゝこれこれ！んー……名前は大河だし、riverで！」

r・i・v・e・rと！

入力完了！！

んじゃ、早速対局申し込みをするか！

んー……誰にしよう……

よしっ！この人にしよう！！

「目標は百人斬り！行くぜ！！」

「3局目終局つと！んー……面白いんだけどなあ……もっと強い奴と打ちてえな……」

オレはちらりと時計を見る。

時間はもう9時だ。

晩飯も食べなきゃなんねーし、風呂も入んなきゃなんねーから、もう今日はやめるか……

オレの家は親が帰ってくるのが遅い。

だから、晩飯とかは自分で好きな時間に食べることができる。

だから、今回みたいに、何かに夢中になって遅くなってしまうことも度々ある。

「最後に軽くリストを見てからやめるか。」

画面を対局者リストに切り替える。

すると……

「あれ？たしかichiryuって名前のプロ棋士がいたよな？こいつってもしかしてそいつか？」

もし本当にそうだったらラッキーだ。

時間は結構ヤバいが、本人だったらこの機会を逃すことなんてできねえ……！！

「よし！このichiryuって奴に申し込んでみるか！」

オレは早速対局を申し込んだ。

画面が切り替わる。

どうやら、返事はOKのようだ。

オレは申し込んだ側なので、白番。

オレは、ワクワクとしながらichiryuの第一手を待った。

カチッ

カチッ

オレはすぐに打ち返す。

カチッ

カチッ……………

こいつは間違えなく、プロの一柳だ。

しかし、まだ全く本気を出していない。

まあ、そうだろう。

プロがネット暮なんてお遊びのつもりの可能性が高いのだから……………

だが、このままにはさせねえ!!

カチッ

……………

オレの牙を向いた一手に、今までテンポ良く打ってきた一柳の手が止まる。

「さあ、どつ来る!一柳棋聖!!」

カチッ

うーん……ここに打ってきたか……  
確かに、並の打ち手には効果的な返した。  
しかし、オレには無意味だ!!

カチッ

カチッ

「ここが、甘いぜ!」

カチッ

……

カチッ

カチッ

カチッ

カチッ

……

……一柳が本気になった……

だが、少し遅かったな……

もう、終局が見えてきた……

それはやっぱり、一柳にも見えていたようで

【Black has resigned . White  
won .】

と画面上に文字が浮かんだ。

オレはせっかくの機会なので、一柳にチャットを申し込んだ。

【タノシカッタデス。デモ、モウスコシハヤク、ホンキニナツテホ  
シカッタデス、イチリュウセンセイ。】

【マケタイイワケデハナイガ、ワタシモキミトサイシヨカラゼンリヨクデ、タタカツテミタカツタ。ソシテ、キミハダレダ？コレホドノチカラヲモチナガラ、マサカアマデハナイダロウ？】

【プロ ज्याナイデスヨ。タダノアマデス。】

【！？モツタイナイ！！キミハプロニナルベキダ！イマ、キミハナンサイド？】

【12デス。】

【12！？…………キミ、ダレカニシジシテイルノカ？モシシテイナイナラ、ワタシノモンカニハイラナイカ？モシキミガ、トウキヨウニスンデイナイナラ、ワタシノイエニゲシユクシテモイイ！キミハサイノウガアル。ソノサイノウヲノバスベキダ。】

……………

本気で言っているのか？

冗談で言っているようには、全く見えないが……………  
だが、確かに、プロに師事するのは凄く勉強になるだろう。

そして……………

「プロ棋士かあ……………懐かしい夢だ……………」

プロ棋士……………

それは、前世でのオレの夢……………  
色々あって諦めた、懐かしい夢だ……………

だが、佐為と互角に打てるようになるには、トッププロ並の力を付けなければならぬ。

これはまたとない素晴らしい機会なのではないか？  
そう考えた瞬間、オレはすぐさま文字を入力した。

【モンカニハイリタイデス！】

【ワカッタ。クワシクハデンワニシヨウ。キミノイエノバンゴウヲオシエテクレルカ？】

【××× - ××× - ××××デス。】

【トリアエズ、キョウハモウオソイ。アシタノヨルフジニデンワスルヨ。】

【ワカリマシタ。デハ、アリガトウゴザイマシタ！】

【コチラコソ。】

オレはすぐにパソコンの電源をシャットダウンした。  
時間はもう凄く遅い。

今から晩飯食って、風呂入って……………

うわー……………やべーな……………

流石に親が帰ってくるかも……………

だが、それ以上の……………いか、比べるのもおこがましいぐらいの収穫があった。

本当に一柳先生の門下に入れるならば、オレはさらに強くなれるだろう。



「よし！打倒佐為への第一歩だ！！」

オレは決意を固めた。

## 6 懐かしの「夢」？（後書き）

カタカナが多すぎて読みにくいですね……

すみません……

## 7 懐かしの「夢」？（前書き）

総合評価が上がっていてとても嬉しいです。

皆さん、ありがとうございます……！

## 7 懐かしの「夢」?

今日、朝起きるともう家には誰もいなかった。

まあ、もう昼だから当たり前といえば当たり前だ。

父と母は、ザ 仕事人!!

というような人達で、家でゆっくりしていることなんて全くと言っていいほどなく、今日も朝から仕事に行った。

兄貴は、部活で学校だ。

一応、親には一柳先生に弟子入りするかもしれないということ伝えてようと思っていたが、昨日もなんだかんだで、親が帰って来る前に寝てしまったので、まだ伝えていない。

まあ、喜びはしても、止めはしないだろうから、正式に決まったら伝えよう。

父なんて、昔兄貴に無理やり暮をやらせようとするぐらい、暮が好きだしな。

反対するはずがない。

オレはそう考えをまとめると、いそいそとパソコンを立ち上げる。

オンボロパソコンなので、立ち上がるのに時間がかかるので、その間に朝食兼昼食の準備をする。

ちよつど、ご飯の準備が整った頃、パソコンがようやく立ち上がった。

「よーし! 今日も元気に連勝記録を伸ばすぞ!!」

昨日と同じハンドネームでログインした。

すると、すぐに対局申し込みが来た。

昨日はずっと自分から申し込んでいたので、なんだか少し嬉しい。

オレはもちろんOKした。

画面が対局画面に変わる。

よしっ！がんばるぞ！！

「ふー……疲れたな……あれから何局もぶっ通しでやったからな。しかも、全部申し込まれた対局だ……」

なんで、こんなに申し込まれたのかを考えてみると、たぶん、昨日一柳先生に勝ったことがネット上に広まったからだと仮定した。

なぜかというと、申し込んで来た奴らは皆ある程度以上の棋力を持つていたからだ。

たぶん、ネット上での噂を聞いて申し込んできたのだろう。

まあ、そのおかげでオレは、苦勞せずにまあまあ強い人達と対局できる。

とても嬉しい話だ。

だが、ネットとは凄いな……………

たった一日でこれだけ広まるとは……………

……………気をつけよう……………

ふと外を見ると、もう真つ暗になっていた。

時計を見ると、時刻は午後6時45分を示している。

……………予定では、あと少しで一柳先生から電話がくる……………

オレはそう考え、申し込まれた対局を全て断りログアウトした。

今回の成績も全勝。

まだ、ネット碁では負けなしだ。

オレはパソコンの電源を切り、電話の前で待ち構える。

まだ15分近く先だというのに……………

それだけ、楽しみにしていたということだ。

じーっとオレは電話をみつめる。

時刻は午後6時50分。

まだまだだ。

部屋中の空気がシーンとする。

もともとオレ一人しかいない空間。

オレが電話の前でじーっとしていれば、必然的にそうなるに決まっている。

チクツタクツチクツタクツ……………

時計の秒針の音だけが部屋に響く……………

「んで、お前何やってんだ？」

「うわあっつ！！」

オレはバツと後ろを向く。

そこには、何時の間にか帰って来た兄貴がいた。

「急に人の後ろから声かけんなよ！！心臓が止まるかと思ったじゃん！！」

「かっかっかっ！！そんな分けねーだろ！……………いやさ、なんか異常に部屋が静まりかえってたからさ、ノリでつい。」

はあー……………

全く、オレがどんなに緊張していたんだと思ってんだよ、この糞兄貴は……………

「んで、今日の晩飯は何だ？もう食ったか？」

「いや、まだ。母さんが、冷蔵庫に作ったのいれてんじゃね？」

「そーだな。お前も一緒に食つか？」

兄貴は冷蔵庫があるキッチンへと進みながらオレに問う。

「いや、この後用事あるし、後ででいい。」

「りょーかい！」

時計を見ると、もう6時58分だ。

兄貴と話しているうちに時間が過ぎていたらしい。

緊張していたオレだが、さっき兄貴に脅かされたことにより、リラックスをすることができた。

心臓に悪い出来事だったが、その点だけは、感謝する。

ガチガチのままじゃあ、何言っちゃまうか分かんねーしな。

「そんで、お前は誰からの電話を待ってた？あつお前の彼女だろ！！そんなにガチガチになって電話の前に張り付いてるってことわよ！全く……小学生のくせに生意気な！！！」

兄貴がキッチンからオレに話しかける。

オレの家はキッチンとリビングが繋がっており、キッチンからでもリビングにいる人と話せる形になっている。

「馬鹿兄貴！！そんなんじゃねーよ！！！」

「そーかあ？怪しーな？」

兄貴はニヤニヤしながらオレに言う。

はつきり言つて、不愉快だ！！

「違げーつってんだろ！！—柳先生だよ！！—柳先生！！！」



オレは兄貴に投げやりに言い返す。  
すると、兄貴は気持ち悪いニヤニヤ顔を辞め、元の顔に戻った。

「一柳って確か、碁のプロだよな？なんでそんな奴がお前に電話してくんだ？」

「あーそだよ。実は昨日、ネットで知り合ってたさ。門下に入らないかって誘われたんだ！！」

オレがそう言うと、兄貴の手が止まった。  
そして、

「お前、門下に誘われるくらい碁が強かったのか？……お前は俺と違って、親父に無理矢理習わされていなかっただろ？お前がなかなか打てるってことは知ってたが、そこまで強えーとは知らなかったぜ。」

と心底驚きました！  
というような表情を浮かべて言う。

あー……そういえば、兄貴と打つとき若干指導碁打ってたわ……しかも、指導碁ってことがバレないように細心の注意をはらった……

兄貴ってまあまあ強かったし、兄貴より碁をやっていたなかったオレが勝ちすぎるのも怪しいかな……って思って……。  
もちろん、手を抜いたりはしていない。

全力で、兄貴に指導碁をした！！

まあ、バレたら縁切られそうで怖いけど……  
オレの一生の秘密だ。

「へん！兄貴が暮を打たなくなっからも、オレはひっそりと続けてたからな！実力をつけて当たり前さ！！」

ということに、しておこう。

「ふーん……まあ、いいけどな。俺は、将棋一本だしな。……だけどお前、親父達に言ったのか？反対はされねーと思けど。」

「いや、まだ。だって昨日から顔合わせてねーもん。ま、今日言うよ。」

チンツッ

という音が部屋に響く。

兄貴が晩飯を温めたレンジの音だ。

兄貴は晩飯をレンジから取り出し、リビングのテーブルへと持ってきた。

「そんで、電話は何時にくる予定なんだ？」

そう言われてはっとした。

時計を見ると、午後7時10分だ。

時間はもう過ぎている………

「7時の予定なんだが………まあ、7時ぐらいつて言ってたしな。」

「ふーん、そつか。あつ、大河、そのリモコン取って。7時から見てえ番組があつたんだよ。」

俺は自分の目の前に置かれていたりリモコンを兄貴に渡す。  
兄貴は、リモコンを受け取ってすぐに電源を入れ、見たい番組に切り替えた。

「ぎゃははははっつ！あー面白えー！！」

兄貴の笑い声が家中に響く。

オレも電話から気を反らすために一緒に見ることにした。

15分ぐらい経つと、コマーシャルが入った。

すると、オレはすぐに来ない電話が気になり始めた。

……………なんで来ないんだよ！！

あつ……………もしかして、教えた電話番号を間違えたとか？

あー！こんなことになんなら、オレも一応、一柳先生の電話番号を聞いておくんだつた！！

オレは大人しく待てなくなり、電話の前を右往左往する。

すると、

プルルルッッ

という電話の音がオレの耳に聞こえてきた……………



7 懐かしの「夢」？（後書き）

長くなりそうだったので、いったんここで切りました。

次回こそ、大河の門下入りです！！

## 8 懐かしの「夢」？（前書き）

沢山の評価ありがとうございます！！

やる気が出たので、珍しく連日投稿しました 笑

## 8 懐かしの「夢」?

バクツバクツ

という心臓が激しく鼓動する。

オレは、恐る恐る電話を取った……

「……はい、加賀です。」

『おおっ！君がriverかい！？いやー、遅くなって済まなかったね。実は、私の弟子たちに、新しい弟子が入るかもしれないって話したらよ、どんな奴なんだって聞かれてね。いやー、その腕はかなりのもん！だってプロの上段者を破った腕だからね！って言うてやったんだよ。まっ、その破られたプロが私なのだが！！そしたら、皆興味を持つちまってな！今までずっとお前さんの噂話をしていたのだよ！そしたら、遅くなってしまった。いやー本当にすまん！！』

……マシンガントーク……

凄く良く喋るな、この人……

なんだか、一気に脱力した……

「いや、大丈夫ですよ。」

『そーか、そーか！ああ、そういえば、自己紹介がまだだったね。私は、一柳。知つての通り一柳棋聖さ！！river、君は！？』

あー……確かに自己紹介してねーや……

遅過ぎだな……

「オレは、加賀 大河です！。ぜひとも、一柳先生の門下に入れて下さい！！」

オレは、自分からそう切り出した。

だって、そーじゃねーと、こんなにマシンガントークをする人相手じや、いつまで経っても終わらないと思ったからだ。

『ああ、もちろん大歓迎だよ！なんせ、君の実力は、証明されているからね！！そーだ！早速、親御さんとの挨拶も兼ねて明日の研究会に親御さんと参加してみるかい？』

願ってもない申入れ！

オレはもちろん

「行きます！！」

と即答した。

『そうか、そうか。場所は、私の家なのだが、君は場所を知らないからね。よし！最初だし、私自ら迎えに行こうではないか！！』

！？

ちよつと待て！！

これから師匠になる人に、そんなことをさせるべきではない！！

「いえ！住所さえ教えていただければ、自分で行けます！！父にも一緒に来てもらうので！先生自らなんてとんでもない！！」



『そうかね。じゃあ、私の家の住所だが、×××市××××××××××××だよ。あと、電話番号は、××××××××××××××××。もし、道が分からなくなったら、かけてくれ。』

オレは、急いでメモを取る。

……………良かった……………

電話の横に、メモ用紙とペンを常備させといて……………

「分かりました！あと、何時くらいに伺えば良いですか？」

『おお、そうだな……………研究会自体は14時からだから、その30分前くらいに来てくれないか？今後について、親御さんと話したいからね。』

オレは、メモ用紙に時間もメモする。

「はい、父にも伝えておきます！」

『大河君に会えるのを楽しみにしているよ。じゃあ、おやすみ！』

「はい！失礼します。」

ガチャ

オレは、電話を元の場所にもどす。

その瞬間……………

くぁー……っつー！！

楽しみにしているよ。

っつてこっちのが楽しみにしてますよー！！

あー、早く明日になんねーかな！

研究会つてことは、先生の他にも沢山のプロが来んだろ！？  
やべえ！やべえ！！

オレは、思わず小躍りをしてしまった……

いや、ね……

すっごく嬉しかったんだが、流石に先生との電話中に騒げねーだろ？  
だから、電話が終わった途端につい、ね……

兄貴が部屋に戻っていてくれて良かった……

こんな所見られたら、しばらく笑のネタにされちまう……

オレは、兄貴が来る前までに、落ち着こうと思ひ、深呼吸を数回する。

そして、落ち着いたことにより、オレはあることを思い出した……

「あ、……オレ、父さんの予定も聞かずにOKしちゃった……」

オレの親達は、休みの日も基本的に仕事に行く……

「……つてことは、もしかしたら、明日の研究会行けねーかもし  
れねえつてことか？」

いや、それはないだろう……

父さんの仕事好きもなかなかだが、碁もそれに負けないくらい好き  
だ。

息子のオレが、棋聖を持つ一柳先生の弟子になるのに、反対するわ  
けねーし、せっかく、プロに会える機会を逃すはずがない。

……ない……よな？

オレが、うだうだ悩んでいると、玄関の方から

「ただいまー。」

と言う声が聞こえた。

父さんだ!!

何で、今日はこんなに早いんだ？

土曜日だからか？

いや、いつもならもっと遅い……

父さんが早く帰って来るとしたら、仕事が一段落して、時間が空いた時か、明日が出張の日だけだ……

……まさか、出張じゃないよな……？

そんなことを考えているうちに、父さんは、リビングへとやって来た。

「お、大河じゃないか！珍しいな、お前が何もせずにリビングにいるなんて。お前、いつも部屋に引きこもっているじゃないか。」

失礼な……

部屋に引きこもってるのは、父さん達が帰って来るのが遅いから、もう寝てんだよ！

朝も父さん達の方が早えーし。

「………そういつ父さんこそ、今日は珍しく早えーじゃねーかなんぞ？」

「ああ、仕事が一段落してな。早く帰ることになったんだ。」

「セー！フツツ！！」

良かったあ、出張じゃなくて。

これなら、希望大だ！！

「じゃあ、父さん、明日暇だったりする？」

「いや、仕事だな。まあ、いつもよりは、大変ではないがな。というより、仕事内容はあんまりないんだが、仕事をしていないと落ち着かなくてね、無理に出ているような物だよ。」

「仕事中毒かい！？」

「だが、これならいける！！」

「実はさオレ、一柳先生に弟子入りすることになったんだ。」

オレがそう言った瞬間、父さんはフリーズした。

「それで明日、一柳先生の研究会に弟子入りの挨拶も兼ねて、さんと来てくれてって言われたんだけど、来てくれねーか？」

「もちろん、行くさー！！」

「恐ろしいほどの即答……」

「やっぱり、父さんの暮好きもなかなか凄いな……」

「サンキュー。」

「というか大河、お前、いつのまにそんなことになってたんだ！？」

その上、プロに弟子入りをするぐらいの棋力……そんな力どうやって身につけたんだ？しかも、そのプロがあの一柳棋聖！？つまり、俺は明日、一柳棋聖に会えるんだな……！」

父さん……

テンション高いですわ……

ミスターですかい……

「ネットで知り合ったんだよ。それで、12歳でその棋力だったらプロになれるって言われて誘われたんだ。じゃ、明日の13時30分にこの住所の所に連れてって。そこ、一柳先生の家だから。」

父さんは、そのメモ用紙を崇めている……

いやあー、不気味だな……

オレは、リビングに一人、怪しい行動をしている父さんを残して、部屋に戻った。

## 8 懐かしの「夢」？（後書き）

次回こそ、研究会に参加です！

## 9 懐かしの「夢」？（前書き）

こんなに、評価をいただいて、本当に嬉しいです…！

小躍りしそうです 笑

明日は、忙しいので、今日中に投稿しようと思いましたが……

## 9 懐かしの「夢」?

目が覚めると、13時でした……………

「っておい!!時間やべーじゃん!急がないと!」

オレは、慌てて着替える。

上は、パーカー、下は、ジーンズ。

無難な格好だ。

着替え終わると、今度は洗面所へと走る。

歯ブラシに歯磨き粉をつけ、猛スピードで歯を磨く。

歯を磨き終わると、洗顔。

その次は、髪だ。

とは言っても、ブラシでとかすだけが…………

こつという時、男で良かったと心底思う。

時計を見ると、所要時間5分。

なかなかの記録だ。

リビングに行くと、父さんは、もう用意万端で、ソファに座っていた。

その父さんの横には、某有名店のお茶菓子が置いてある。

たぶん、一柳先生へのお土産だろう。

昨日まで、あんな物は、家に無かったので、今日の午前中にでも、買いに行ったのだろう。

「おお、大河、おはよう。」



「…………おはよ。」

父さんは、やっとオレが起きて来たことに気がついたようだ。だが、オレがまだ寝ていることに気がついてんなら、起こしてくれても良かったのに……

「起こさなかったんじゃないかって、起きなかったんだからな。全く、こんなに大事な日に寝坊なんて……………これ以上寝ているようだったら、叩き起こすつもりだったよ。」

どうやら、オレは不満の表情を浮かべてたようだ。

しかし、そんなに熟睡してたのか、オレ？

昨日は、まあまあ早く寝たんだがな……………

「じゅめんって！それで、何時に家を出んの？」

「15分には出るぞ。それぐらいの時間で丁度良いだろう。人の家の上からせてもらう時は、遅過ぎず、早過ぎずを心がけなきゃならんからな。」

うおー……………

久しぶりに父さんのまともな発言を聞いたよ……………

昨日なんて、もうミーハー発言ばっただけだったしね。

「了解。そんじゃ、軽くパンでも食べよっかな……………」

「ああ、それなら、母さんが、美味しそうなパンを買って来てたぞ。戸棚の中にあると思うよ。」

オレは、父さんが言っていたパンを戸棚から取り出す。

確かに、けっこう美味しそうだ。  
オレが好きなチーズ系のパンだし。

オレは、冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注ぐ。  
これで、オレの軽食の出来上がり。

「いただきまーす！」

「おう。だが、あと5分だからな。」

父さんの言葉で時計を見ると、確かにあと5分だ。

……………急がないとな……………

オレは、急いで軽食を完食した。

15分になり、オレと父さんは、家を出る。

父さんの手には、やはりあのお茶菓子がある。

近くで見ると、家では絶対に食べない、高級和菓子ということが分かった。

……………そうだな……………

弟子入りすんのに、お茶菓子1つ持って行かないって常識はずれだな。

買って来てくれた父さんに感謝だ。

車に乗り、約10分。

前方になかなか大きい、日本邸が見えて来た。

さっすが、タイトルホルダー……………

時計を見ると、28分。

素晴らしいくらいピツタリだ。

車から降り、インターホンを鳴らす。

すると、すぐに

『はい、一柳です。』

という声が聞こえた。

「加賀です！こんにちは！」

『お！大河君か！！いらっしやい。すぐに開けるよ。』

コンコンッッ

音がした方を見ると、

父さんが、車の中から、口パクでおそらく

「駐車場どこ？」

って言って来た。

おおつと危ない……………  
車の存在を完璧忘れてた……………

「あつ、先生！車って何処に止めておけば良いですか？」

『ん？ああそうか。今日は車で来たのだね？車だったら、この家の駐車場に、お客様用の駐車場があるからそこに止めておいてくれ。この家の塀沿いに右側に行ったら、分かるはずだよ。』

オレは、父さんにそっくりそのまま伝えた。

その後、数分後、車を置いて来た父さんが戻ってきた。

オレは再度インターホンを鳴らす。

すると、待っていたかのように、玄関から一柳先生が出て来た。

「おお、よく来たね！さあ、上がってくれ！」

一柳先生がオレと父さんを手引きする。

オレと父さんは、恐る恐る屋敷へと上がらせてもらった。

一柳先生の家は、純和風な感じで、落ち着いた空間だった。  
なんだか、とても居心地が良い場所である。

オレと父さんは、数ある部屋の中で、客室として使われていそうな部屋に通された。

部屋にあるもの一つ一つが上品で美しい。

「ささ、こちらに座ってくれ、大河、とお父さん！」

オレと父さんは、言われた通りに座る。

横目でチラリと父さんを見ると、ガチガチに緊張している。

やっぱり、囲碁ファンにとっては、大物だからな、一柳先生は。

そういうオレは、昨日あんだだけ電話で緊張していたのに、今はそうでもない。

横にガチガチに固まっている父さんがいるせいだろうか……？

「いやー、始めましてと言うべきかな？ 私は、一柳。棋聖のタイトルを持っているよ。これからよろしくお願いするよ。」

「改めまして、加賀 大河です！これからよろしくお願いします！」

オレは、深々とお辞儀をする。

父さんも横で同じように、お辞儀をした。

「うちの愚息ですが、こんな愚息で良ければ、ぜひぜひ鍛えてやって下さい！！」

すると、一柳先生は大袈裟に驚いた風にして言った。

「愚息だなんて、とんでもない！ いやー、この子の才能には驚かされましたよ！！この年齢でプロに勝つ！？しかも、そのプロが私なのだからね！ まあ、本気ではなかったとしても、凄い才能だよ！！これはうもらせてはならないって思ってたね！ 少し強引かなって思ってたんだが、つい門下に誘ってしまったよ！ いやー、これからの大河君の成長には、期待大ですよ！！それに………

やっぱり、マシンガントーク……

こりゃあ、一柳先生の得意技だな……

何だか、視線を感じたので、視線の元を見て見ると、父さんが、

え！？お前、一柳先生に勝つぐらいの棋力を持つてたの！？

って言いたそうな顔をしていた。

というか、ちゃんと人の話を聴けよ！

本気ではなかったって言ってるじゃん！！

オレは、父さんのウザい視線を無視することにした。

………と言うように、大河君には、凄い才能があるので、安心してうちに預けてくれ。」

って、まだオレの才能うんぬんの話が続いていたんかい！？

どう聞いたって、過大評価だろ！！

「もちろん、願ってもないことです！！………大河頑張るんだぞ！」

「おうー！！」

オレは、元気良く返事をした。

すると、父さんがごそごそと何かを取り出した。

「遅くなりましたが、つまらないものですが、どうぞ。この後の研究会の時にでも召し上がって下さい。」

取り出した物は、例のお茶菓子だった。

「有難く頂くよ。……おお、これは私もよく食べるよ。後で研究会にだしますね。」

よく食べるって……………

さすが、タイトルホルダー……………

いや、こんぐらいじゃ、タイトルホルダーは関係ないか？

「じゃあ、そろそろ、研究会の準備をしなくてはならないな。お父さんは、研究会の間どうされます？」

一柳先生が時計を見た後に言う。

たしかに、もうそろそろ研究会の時間だ。

「父さん、帰ってていいよ。オレ、道覚えだし、一人で帰れるよ。」

「それなら、そうするか……………」

そう言って父さんは、帰り支度を始めた。  
すると、

「あ……！」

といきなり声を上げて、鞆の中から、ごそごそと、白いものを取り出した。

「これに、今日来るプロの方々と一柳先生にサインもらっという！  
よろしく……！」

と言って、取り出した物をオレに渡して、一柳先生に挨拶をし、父さんは部屋から退出した。  
渡された物を見ると、色紙だった……

最後の最後でミスター精神かよ……

オレは何だか、脱力してしまった。

いよいよ、研究会だ。

研究会の場所は、さっきいた部屋とは違う、和室でとても広く、碁盤と碁石のセットがいくつも用意されている場所だった。

見渡してみると、プロの人ばかり……  
しかも、けっこう有名な人も多い。

………もしかして、プロじゃないのってオレだけ？



なんて思っていると、一柳先生の挨拶が始まった。

「ごぼんっつ。今から研究会を始めるぞ。最初に、昨日言っていた新しい門下の 加賀 大河君だ！この中では唯一プロではないが、プロと遜色がないぐらいに、打てる！！今日の研究会から参加することになった。」

…………… やっぱり、オレだけか……………

チラリと一柳先生をみると、目で（挨拶しろ！）って言っていることに気がついた。

「あつ。紹介にあつた、加賀 大河です！よろしくお願いします  
！！」

少しどもりつつも、挨拶をした。

すると、他の皆さん全員、暖かな視線をくれながら、

「…………… よろしく、大河君！……………」

と言ってくれた。

「よし！じゃあ、最初にきちんと、棋力を測るために、対局から始めるか！」

棋力を測るってことは、オレが対局することだよな？  
でも、誰と対局すりゃー良いんだ？

オレが周りをキョロキョロしていると、いかにも人が良さそうな人

が声をかけて来てくれた。

「もしよかったら、僕とやらないかい？」

「おっお願いします！！」

こうして、オレの研究会デビューが始まった。

9 懐かしの「夢」？（後書き）

微妙なところで切ってしまった気が……

微妙だと感じたら訂正するかもです……

10 懐かしの「夢」？（前書き）

沢山の評価と感想ありがとうございます！！

もう、小躍りを超えて、飛んで跳ねて喜びました 笑

皆さんの評価や感想がやる気になってます！！

本当にありがとうございます（＾Ｏ＾）ノ

## 10 懐かしの「夢」?

研究会は、それはそれは、とても勉強になる物だった。

最初に対局したのが、4段の幸村プロ。

とても、優しそうな雰囲気のお兄さんだった。

結果は、オレの2目半勝ち。

それには、一柳先生以外の先生達が皆驚いていた。

それは、そうだろう。

まだ、プロにもなっていない子供が、4段の

プロに勝ったのだから………

一柳先生は、

「本気ではない私との対局だったが、私に勝ったのだから、これぐらいの棋力はあるだろう。」

と言っていたが。

その対局を皮切りに、沢山のプロの先生が、オレに対局を申し込んできた。

一つ一つの対局が、とても勉強になる素晴らしい物だった。

対局を終えた後、一柳先生に、オレの今の棋力を尋ねると、だいたい、7段くらいはあるそうだ。

これには、凄く驚いた。

だが、驚いていたのはオレ一人で、他のプロの先生方は頷いていた。

「今年の夏のプロ試験は、いただいたな!というか、俺に勝ったん

だから、絶対に受かれよ!!」

なんて、声を掛けてくれたのは、2回目の対局をした相手の吉原5段。

フレンドリーで明るい先輩っていう感じの人だ。

この研究会で、何より勉強になったのが、この時代の定石だ。オレの碁の知識の7割は、前世の記憶からきた物だ。よって、オレの使う手は、少し古い。

これでも一応、週刊囲碁などで、学んだつもりだったが、まだまだ甘かったようだ。

最後に、改めて一柳先生と対局した。

結果は、中押し負け……

やっぱり、タイトルホルダーの壁は高かった。

沢山のことを学び、沢山の対局をしていると、時間はあっという間に過ぎ、何時の間にか、結構遅い時間になってしまっていた。

研究会が終わった後、オレが一人で帰ろうとしていると、吉原さんが、

「子供がこんな時間に、一人で行動すんな!乗ってけよ。俺、今日車だし。」

と言って、家まで送ってくれた。

最初は、やっぱり先輩に送ってもらうのは悪いかな?

って思ってた断っていたが、ほぼ強制的に乗せられた。

まあ、凄く助かったのだが……

家に着き、オレが車から降り、お礼を言って去ろうとした時に

「お前と打つの凄く勉強になったし、楽しかったぜ！次の研究会もちゃんと来いよー!!」

って声を掛けられたのは、凄く嬉しかった。

家に帰ると、晩飯を食べ風呂に入った後、すぐに寝てしまった。

一日中、頭を使っていたからだろう。

余談だが、先生達のサインを父さんに渡すと、泣いて喜んだ。父さん以外の皆が、その光景に思わず引いてしまった。

……そして、翌日……

「オレ、研究会のおかげですげー強くなったはずだから、佐為と打たせてくれ!!」

オレは、学校に着いてすぐに、進藤を捕まえて言った。  
進藤は、いきなり声を掛けられたことに驚いたのか、戸惑っている。

「えっ、また打つのかよ？金曜日に打つたばかりじゃん！オレ、今日はサッカーしたいし。というか、“けんきゆうかい”って何だよ？」

……………そうだよな。

進藤に難しい言葉は通じないな……………

オレは、進藤の様々なテストの結果を思い出した。

最近は、少しマシになったとはいえ、進藤の語彙力のなさは、今だに継続中だ。

「“研究会”ってのは、今回のことと言うと、暮のお勉強会だよ。

何人かの実力者とかを集めてやるんだ。オレはこの前、たまたま誘ってもらえてな、行ってきたんだよ！」

『いいな！いいな！！私も行きたい！ねえ、ヒカル、私達もその研究会つてのに行きましょよ！！』

進藤がいきなり耳を塞ぎだした。

視線が右後ろを向いているので、おそらく佐為が何かを言っているのだろう。

全く、不便なことだ。

オレにも、佐為の声が聞こえたら良かったのに……………

すると、進藤が何かを諦めたような表情を浮かべ、オレに話しかけてきた。



「なあ、大河。その研究会ってやつは、オレでも参加できんの？」

オレは、この言葉を聞いて、佐為が何をヒカルに煩く言っていたのかを理解した。

「たぶん、オレが先生に口添えしたら行けると思うよ。でも、ヒカル自身の棋力じゃ無理だから、佐為の棋力を見せなきゃなんねーぞ。目立ちたくなかったらやめた方が良くと思うぜ。」

オレがそう言った瞬間、進藤は

「じゃ、いいやー！」

と言って、自分の席に戻ろうとした。

耳を塞ぎながらだったので、たぶん、佐為が文句でも言っているだろう。

「って、ちょっと待て！今日は結局、佐為と打たせてくれるのか！？」

危ない、危ない。

もう少しで、このままこの話が流されてしまうところだった。

今日の一番の目的だったと言っのに。

「だーかーらー！オレは、サッカーがしたいの！今日は暮を打つ気は起きねえのー！」

進藤は、若干苛立ちを含ませながら言う。

サッカー………というか、スポーツは、進藤の好きな遊びだからな

……  
でも……

「佐為を研究会に参加させることが出来ねんだから、オレと打つぐらい付き合ってくれよ!!」

『そうですよ、ヒカル！私も打ちたいです!!』

進藤がまた耳を塞ぎだした。

こういう時はたいてい、進藤は、佐為の意見に負ける……

「あーもう、分かったよ！でも、今週はそれで終わりだかな！あとは、サッカーとか野球に付き合ってもらっぞ!!」

やっぱりな。

オレは、進藤の言葉に頷く。

今週最後つてのが残念だが、嫌がる進藤をこれ以上無理やり付き合わすわけにはいかないからな。

すると、ちょうど良く先生が教室に入ってきた。

朝のHRが始まるので、教室中にバラバラに散っていた生徒達が、それぞれの席に戻る。

オレと進藤もそれにならない、自分の席に戻った。

楽しみなことが先にあると、時間の流れは凄く長く感じる。  
楽しいことをしている時は、あっという間に感じると言つのに……  
全く、不平等だ！！

オレは、そんなことを考えながら、帰りのHRを受けていた。  
時計と担任の先生の顔を交互に見て、机の上を指でトントンと叩く。  
これは、担任への、

“早く、終わらせる！！”

というアピールだ。  
はつきり言つて、周りから見れば  
何、こいつ？  
というような、状態だろう。

しかし、アピールのいかいもなく、先生の話はいつもより長い……  
もしかしたら、オレのアピールにイラッとして、わざと長くしてい  
るのかもしれない……

オレは、苛立ちを隠せずに、むすっとした顔をしていたのだろう。  
遠くの席から進藤が苦笑を浮かべている。

「……………連絡は以上です。それでは、全員起立!」

担任のその言葉を合図に、生徒達は立ち上がる。

「気を付け、礼!」

「……………ありがとうございました!」

オレは、そう言った瞬間ランドセルをからい、進藤の元へと行く。  
進藤は、若干呆れた表情を浮かべながらオレを見ていた。

「なんだよ、その顔は?」

「いや、さ。大河ってホント、碁バカだよな……………佐為もだけど…

……………」

なんだよ、それ。

まあ、碁バカなんて、オレにとっては、褒め言葉だけだな!!

「碁バカで結構!それよりも、早くオレん家行くぞ!授業中に良い手が浮かんだんだ!!」

オレは、あまり乗り気ではない進藤の腕をグイグイと引っ張って行く。

早くしないと、忘れちゃうかもしねーからな。

まあ、こう見えてもまあまあ記憶力の良いオレは忘れはしないとは思うが。

「授業中にまで碁のことかよー。勉強しろよな、ちゃんと!」

「『お前<sup>ヒカル</sup>には言われたくねえ！（ないでしょう！）』」

そう言った瞬間、進藤ががっくりと肩を落とす。

どうやら、自覚はあったようだ。

というか、小学生で、あんな点数取ってたら、まじでこの先ヤバイと思う……………

そんなくだらない会話を続けていくうちに、あっという間にオレん家に着いた。

今日も、家への一番乗りはオレだった。

まあ、両親は仕事で、兄貴は部活なのだから、当たり前といえば当たり前だ。

進藤は、もう慣れたようで、オレより先にオレの部屋に入る。

オレもその後につき、自分の部屋に入る。

「よし！佐為、始めんぞ！！」

オレは、碁盤と碁石の準備をする。

その間に、進藤が座布団を持ってきてオレと自分の所に置いていた。

「んじゃ、オレが握るぞ！」

オレは、碁石を掴み、碁盤の上に置く。

オレは7個の白石。

進藤は、1個黒石を置いた。

つまり、佐為が黒石だ。

「それじゃ、始めますか！」

「「「お願いします……！」」」

オレは、進藤……いや、佐為の第一手をじっと待った。

10 懐かしの「夢」？（後書き）

長くなりそうなので、一旦切ります。

研究会の話は、この話では、軽く流しましたが、第三者視点で後日詳しく書きたいと思っています!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8812s/>

---

ああ、懐かしの友よ

2011年10月21日03時06分発行